

# 時代が変わる。農業が変わる。

コメの輸入自由化を求める国内外からの攻勢。農業市場での競争の激化。農業を取り巻く環境は厳しいものがあります。けれども、さまざまな工夫をしながら、農業を魅力ある産業へと変えようとする農家があります。

今、日本の農業は大きな変革期に差しかかっています。農家にはパソコンが普及し、社会的経営をする農家が増えてきました。今後、農業はどのように変わっていくのでしょうか。

## 深刻な後継者不足

今年は、気象観測史上まれに見る冷夏となりました。農作物に与えた影響は、測り知れません。全国で稲作の作況指数が下がり、特にひどかった青森県では指数八十五（八月十五日調査）と大打撃を受けたようです。また、米所である新潟県そして白根市も無傷とはいえません。

それを受けて農林水産省は、来年に向けて、今まで取ってきた減反政策を緩和する方針を打ち出しました。田の面積を増やし、コメの生産量を上げるためです。

ところがせっかくの減反緩和も、農家にとっては手放しで喜べない状況です。後継者の不足という問題があるからです。稲作だけでなく他の

## コスト高の日本農業

日本の農業経営者は、生産コストの問題でも頭を悩ませています。日本のような狭い農地では、人手不足解消のため機械化を図っても、コストがかかりすぎてしまうのです。

白根市の稲作の生産コストは、県の平均値と比べ、かなり高くなっています。これは農機具費、土地改良費などが高いためです。この背景には「農業はなるべく自分のところで」といった自己完結型経営への志向が強いことがあります。その意識が農業機械の過剰な整備を招いていると考えられます。

## 消費者ニーズが多様化

農産物に対する消費者のニーズもかなり多様化してきました。消費者が本心に好むものしか売れない時代が来ています。

コメを例にとってみましょう。今まで消費者の間では、新潟産のコシヒカリというだけで「うまい」という評価が定着していました。ところが最近、同じコシヒカリでも産地はどこなのかを消費者が問うようになりました。現在、魚沼産の評価が高くなり、実際、高値で売れています。残念ながら白根産の評価は高いとはいえませんが、価格も安くなっています。コシヒカリというブランドに頼っているのは、激しい市場競争に打ち勝つことができなくなるのは、目に見えています。

## 大規模経営が増加

このようなきまざまな問題に直面するうちに、農業経営に対する新しい考え方が生まれてきました。

農林水産省が提唱した新農政プラン（注記）には、従来の家族的な個別経営の育成を進めながらも、数戸の農家が集合した大規模経営を推進する考えが盛り込まれています。

大規模経営には、従来の家族的経営と比べ、生産コストをかなり削減できる利点があります。小さな農地よりも大きな農地で経営すれば、がぜん効率が良くなるからです。

## 複合経営への志向が高まる

労働力を有効に使うため、年間を通じて農作業をする周年農業が注目されています。これはコメの収穫が終わった冬でも、他の農産物を作ることで労働力を上手に燃焼させようというものです。他の農作物も作る経営を複合経営と呼びます。

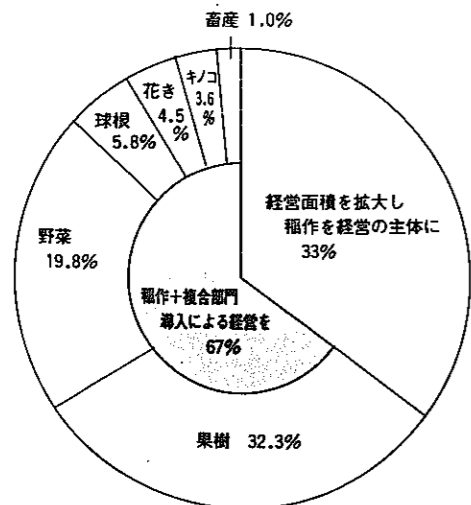
白根市は、稲作のほかに野菜、果樹、花木などの生産が可能です。複合経営の基礎は十分といえるでしょう。白根市の複合経営に対する志向は高く、しかも多様化しています（グラフ）。

時代の変化は、農業に対する考え方を確実に変えています。

表：経営耕地規模別農家数（'90農業センサスより）

年次	(F <sub>i</sub> , %)								
	0.3ha未満	0.3~0.5	0.5~1.0	1.0~1.5	1.5~2.0	2.0~2.5	2.5~3.0	3.0~5.0	5.0ha以上
S55	239 (9.8)	127 (5.2)	292 (11.9)	259 (10.6)	268 (10.9)	350 (14.3)	362 (14.8)	475 (19.4)	64 (2.5)
S60	236 (10.2)	157 (6.8)	249 (10.8)	225 (9.7)	232 (10.0)	303 (13.1)	290 (12.6)	514 (22.2)	90 (3.9)
H2	235 (11.0)	133 (6.2)	233 (10.9)	218 (10.2)	197 (9.2)	251 (11.8)	256 (12.0)	486 (22.7)	121 (5.7)

図：今後の経営方針（平成4年農家意識調査より）



冷夏のため、日照時間不足・低温となりイモチ病が発生。稲作に打撃を与えた